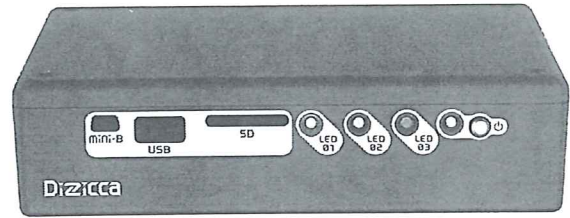


富士ロジテック

R&D会社「富士ロジ・エンジニアリング」が始動
業界最安値のデジタコ「デジーカ」を販売



「デジーカ」本体製品

富士ロジテック(本社・静岡市、鈴木庸介社長)では、「GSE(グローバル・サプライチェーン・エンジニアリング)」企業への進化を目指す一環として、R&D(研究開発)事業を本格化させる。昨年11月にグループのR&D会社「富士ロジ・エンジニアリング」(本社・東京都港区、同)を本格始動させるとともに、今年3月の機構改革で富士ロジテック

「開発本部」を新設した。第1弾として、富士ロジ・エンジニアリングでは6月中旬から、協力会社と共同開発した業界最安値のデジタコグラフ(デジタコ)「Dizicca(デジーカ)」の販売を開始。今後、市場のニーズを調査しながら、労働力不足の解消や物流の高付加価値化のソリューションとなるハード・ソフトの物流機器等の開発に取り組む。

富士ロジテックでは新規顧客の開拓、既存顧客への新たなサービスを提供するため、物流の枠を越えた新規事業への参入を経営の重点課題に据える。物流業界では労働力不足の深刻化により、機械化やシステム化による省力化へのニーズが一層高まっており、業界が直面する各種課題の解決に資するR&D事業に取り組むこととした。

R&D事業の推進体制では、昨年11月に富士ロジ・エンジニアリングを始動。物流機器等の開発を目指す企業とのR&D事業分野における協業体制および富士ロジ・エンジニアリングの事業執行体制が整った。また、富士ロジテックでは、連携強化のため、鈴木社長を本部長とする「開発本部」を新設した。

富士ロジ・エンジニアリングがリリースした第1弾が、車載器1台あたり2万9800円(税抜き)の業界最安値を実現したデジタコ「デジーカ」。ハードウェア開発ではメカトロニクス(福岡)、ソフトウェア開発ではネット

ム輸送温度ロガー」などいくつかの商材の開発に取り組んでいる。将来的には、位置情報、渋滞情報、工場・倉庫の作業状況等の各種データ

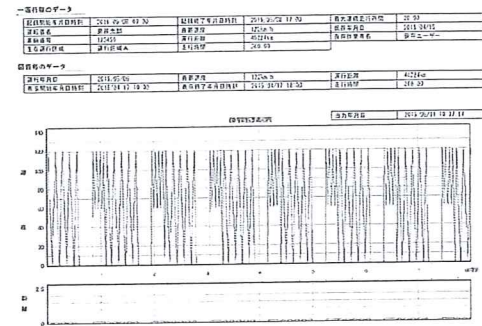
システム(名古屋)の協力により商品化したもので、6月中旬に発売し、夏頃には国土交通省の認定も取得予定だ。

国交省ではさらなる交通事故削減のため、2015年4月から運行記録計の義務付け対象を「車両総重量7ト以上、最大積載量4ト以上」に拡大。4月以降、新車購入に適用され、16年4月以降にその他の車両について順次適用されるため、運送業界でデジタコの導入が一気に進むことになる。

新たにデジタコの装着が必要となる運送会社の負担をできるだけ抑えるため、「デジーカ」は国交省認定取得に必要な3要件(時間・距離・速度)の記録に機能を絞ることで低価格化を実現。機能をシンプルにしているため、配線なども容易で気軽に取り付けられ、取り付け費用も不要だ。

「デジーカ」で特徴的なのがデータのオープン化。SDカードが記録したデータをBluetoothを使ってスマートフォンなどのモバイル端末に送り、サーバーでデータ蓄積も可能。将来的には、GPSや運行管理システムと連動させることで、運送会社が自社の運行記録のデータを自由に活用し、業務の改善に役立てられる。

料金の低迷、ドライバー不足を背景に、運送業界は厳しい事業環境にあり、とくに中小運送会社は安全対策への投資にも限度がある。鈴木氏は「少しでも安い価格で提供したい」と思った。また、データのオープン化にこだわったのは、サプライチェーンをエンジニアリングする力を個々の事業者に取り戻したいという思いから」と話している。



作成帳票イメージ

を活用し、トラックの待機ロスに資する運行管理システムなど、サプライチェーンの全体最適化に資するソリューションを検討していく。